

茨城史料ネット代表 高橋 修

1、豪雨災害発生

9月10日、出勤のため車に乗ると間もなく、叩きつけるような激しい雨になった。笠間市の自宅から茨城大学に向かう途中、前日すでに福島県棚倉町に入っているはずの同僚の添田仁先生に携帯電話で連絡をとった。8時30分頃のことだ。

茨城史料ネットは、東日本大震災で被災した後、その時受けた傷みが進行している、棚倉町の都々古別神社の別当・八槻家の土蔵に収蔵される資料を、高橋他茨城大学教員の受託研究のかたちで調査すべく、学生たちとともに、この日から2日間、活動する予定であった。

間もなく大雨特別警報が出された。こうした状況下で、学生たちを現地に送り込むのは適切ではない。しかしすでに出発の時刻は過ぎている。大学の行事や会議のため、初日の活動参加を断念し、出勤せざるをえなかった私は、その後も添田先生と連絡をくりかえし、10時過ぎには、出発を断念した以外の学生が、現地に到着したことが確認できた。この間、ラジオやインターネットでは、盛んに栃木県内の鬼怒川流域の豪雨とその被害を伝え始めていた。

出勤すると間もなく、この日予定されていたすべての行事や会議が中止になり、過去に洪水を起こしている那珂川を渡って通勤している職員に、帰宅を促す指示が出された。午前中のうちに、筑波大学の白井哲哉先生からのメールで、鬼怒川の氾濫を知る。茨城史料ネットの今後の対応についての相談もあった。午後には茨城県内の鬼怒川の堤防決壊・越水による甚大な被害が、次々と映像とともに飛び込んできた。翌日には、棚倉町の調査に合流しなければならない。大学院生に資料レスキューのための資材備蓄の確認を指示するとともに、白井先生に茨城での対応と情報収集を依頼し、自分は翌日の棚倉入りの準備に取り掛かった。

翌日、自家用車で棚倉町に向かった。他の河川の状況も気かがりだ。那珂川を渡って、久慈川に沿って北を目指したが、さしたる支障もなく、9時30分には八槻家に到着することができた。午前の作業中に、県文化課から電話が入る。主として指定文化財の確認調査のため、14日・15日に鬼怒川沿いの巡検に入るという予定を伝えてくれた。その過程で未指定の被災資料等の救済の必要があれば、いつでも連絡してほしい旨、依頼する。

東日本大震災の時は、われわれボランティアと行政の連携が取れず、活動開始の大きな支障となった。今回、こうしたやり取りが、災害直後にできたことは、茨城県の史料保全の小さいながらも前進だと思う。

学生たちの奮闘により、棚倉における2日目の作業も滞りなく終了。震災で傷ついた土蔵に収められた八槻家資料の全貌をつかむための第一歩を踏み出すことができた。この日、天気は少しずつ回復に向かっていた。(転載歓迎 つづく)

2、一刻も早く現地へ

災害により傷ついた資料を救出しようとする時、まず最初の課題となるのは、どのタイミングで現地に入ればよいか、という問題である。家屋に被害を受けた所蔵者が、水損した資料を家財道具などと一緒に処分してしまう可能性がある。それを防ぐためには、一刻も早く現地に入りたい。しかし災害発生直後は、交通の寸断も予想され、何よりも、われわれがむやみに現地で活動すれば、行方不明者の捜索や、被災者の命を守るための行動等の妨げにもなりかねない。

水害発生から5日目の14日、個人で現地を視察することにした。常総市にアプローチするには、常磐高速道路の谷和原インターから国道294号を北上するのが最短距離だ。しかし被災地を南北に貫く294号や県道357号は通行規制がかかっているらしい。鬼怒川沿いの他の地域の様子も気になるので、まずは国道50号を筑西市に入り、そこから南下を試みることにした。

下妻市まで294号を南に下り、国道125号を西に走って、常総市への幹線道路の入口をうかがうが、やはり南北に走る国道・県道は通行規制がかかっている。やむなく鬼怒川を西に越えて、対岸から南下するが、鬼怒川右岸はまったく被害が無い。そのまま石下のあたりまで南下し、県道24号を東に進む。再び鬼怒川を渡って、運休になっている関東鉄道常総線の石下駅のあたりを走りながら被災状況をうかがってみた。交通規制された県道357号にも、紛れ込むこともできた。このあたりの水は引いているが、浸水の痕跡が残り、流入した土砂が残る。店舗の洗浄やゴミ出しが盛んだ。

三妻駅近くから常総市街の方向をうかがう。ガードレールが浸水の勢いでなぎ倒されている。決壊地点のあたりだろうか、自衛隊やマスコミのヘリコプターが5機以上は旋回している。鬼怒川と小貝川間の距離が広がっているなかなか水が引かないあたりだ。国道沿いの閉店した店舗の駐車場に、100人単位の自衛隊員が終結して指揮官の指示を受けている。この時点では、まだ行方不明者が15名あり、その捜索が続けられていたのだ。

常総市街地では、県道357号を通行することができた。道路沿いの民家で慌ただしく、家族や従業員単位で、泥の掻き出しや家財道具の片づけをしている。人々の表情は険しい。ボランティアの姿はほとんど見かけない。乾いた赤土が土煙りとなって、車が通るごとに舞い上がる。とても窓を開けては走れない。水道はいまだ復旧せず、給水車が活躍している。災害派遣の自衛隊の車や県内外から応援に入った消防や警察の車と頻繁にすれ違う。警察官や消防署員が慌ただしく民家を巡回する。緊迫した状況だ。ひと気のない水海道駅前のテントで外国人が物資の配給所を開設していたのが印象的だった。

このタイミング、資料レスキューが現地に入るのは、適切とは思えない。人命にかかわる活動を少しでも妨げることは許されないだろう。外部から自動車が入り込むこと自体、検問や交通規制の作業員の負担となる。家族の命の存続さえ危ぶまれる状況下で、資料の所在について聞き歩くこと自体が、やはり難しいだろう。資料レスキューに入るタイミングは、もう少し先に送ることにした。

(転載歓迎 つづく)

3、資料レスキューの開始

9月16日の時点で、行方不明者15人の安否は確認された。生活再建に向けて必死で取り組む住民のことを考えると、まだ現地入りするのは早すぎるかもしれない。一方で浸水被害という状況には、大量の家財道具とともに古文書等の資料が早期に処分されてしまう懸念もある。難しい判断が必要になった。

そうしたなか、茨城史料ネットの事務局は、とにかくこの時点で現地に入るという決断をした。人命の問題がひとまず解決したこのタイミングで現地入りすれば、救える資料もあるかもしれない。現地の厳しい反応等も当然予想されるが、強いメンタルをもってやり切るしかない。

この間に、添田先生が、旧水海道市時代の1977年の文書所在目録等を参考に、浸水地域の古文書所蔵者をロードマップ上に落とす作業を済ませていた。あわせて資料所在調査を行う際のマニュアルや調書の様式も作成してくれていたもので、それをもとに現地で資料の被害確認調査を実施する日時を9月18日に決めた。この日から、茨城史料ネット事務局は慌ただしく動き出すことになった。

まず現地に入り調査を実施するには、関係機関の了承と協力が不可欠となる。常総市教育委員会とは一切連絡が取れないので、県文化課を通じて、資料被害確認調査の実施について打診することになった。文化課の尽力により、すぐに市教委の了承をもらうことができた。指定文化財については、すでに県・市であらかた被害状況の確認が進められていたので、未指定の民間の資料に関する被害調査を、ボランティア団体である茨城史料ネットが請け負うカタチを作ることができた。実際に被災地に入った時に、「茨城県・常総市の要請を受けて」と切り出せることは、非常に効果的に働く。大震災の時に、そのことは、身にしみて感じている。

とにかく時間が無いので、人員は事務局を中心に編成するしかない。添田先生の他、白井哲哉副代表、佐々木啓事務局長補佐が指揮官、その他、経験者を中心に参加者を募ることになった。すでに予定の入っていた私は参加を見送らざるをえない。県立歴史館や茨城地方史研究会にも声をかけるが、やはり平日の参加者は集まらない。公務員試験を数日後に控えていることもあり、大震災以来、茨城史料ネットの活動を支えてきた大学院生たちにも、今回は無理をさせられない。

東北・関東豪雨災害が発生してすぐに「被災地への資料保全のための資材の提供」をメールニュースで宣言していたが、調べてみると備蓄資材ははなはだ心もとない状況であることが判明する。震災から歳月が経過し、各方面からいただいた支援金も残り少なくなっているため、活動を継続的に行うには、資金面の不安も抱えることになった。

こうして災害発生から9日目となる9月18日、多くの不安を抱えながらも、茨城史料ネットは、常総市の被災地で、最初の資料レスキュー活動を開始した。なおこの日の活動には、先述の通り高橋は不参加だったので、今回の調査の方針を策定した添田先生に、このメールニュースを通じて当日の様子についての報告をお願いしているので、詳しくはそれに譲りたいと思う。

(転載歓迎 つづく)

4、難航したレスキュー

9月18日、茨城史料ネットによる被災地の被災資料確認調査が行われていた。石下地区と水海道市街地の2班に分かれて、1977年時点での古文書所在情報に基づく各戸訪問による確認調査が始まった。この日の調査に参加できなかった私は、進捗を気にしながら自分の予定を消化し、夕方、現地のメンバーと電話連絡をとった。

予想していたことではあったが、一軒一軒丁寧に来意を説明し、今回の被災状況と資料の所在を確認していく作業には時間を要し、予定の半分も消化できていない。この日現地に入っていた茨城史料ネット事務局の白井・添田両先生が、翌日はいずれも予定が空けられないため、私がこの日の体制をそのまま翌日に引き継ぎ、資料調査を継続することになった。19日は、茨城史料ネットが学生メンバー送りこんでいる公式協力行事「常陸太田市の指定文化財集中曝涼」準備のための巡見が、現地で行われる予定であったが、急遽、そちらは同僚の佐々木啓先生たちに任せて、私が常総市で指揮を執ることになった。

そして翌19日。この日が被災地にとっては特別な日であることは、誰もが感じていた。この土曜日から、いわゆるシルバーウィークが始まるのである。被災者は、家族とともに、この連休の間に生活を再建するため、あるいはその道筋をつけるための作業を集中的に行う計画を建てているだろう。また仕事を休むことができる善意の市民が、県内外から被災地に駆けつけ、そうした作業を強力にサポートすることになるだろう。水損した家財道具の廃棄が一気に加速し、それと一緒に資料が廃棄される危険性も高まるのである。一刻も早く所蔵者に資料保全をお願いしなければならない。

昨日の活動で巡回できていない水海道駅周辺から、被災資料確認調査をスタートする。この日は参加人数も少なく、一班で巡回することになった。まずは鉄道の軌道に沿って北上する。道沿いはゴミの山だ。市立図書館前の廃棄物は山のように積み重なっている。その中には筆筒や襖・障子、丁寧にみると書籍やノートなども含まれている。不安は高まる。ブロック塀や垣根には、泥水が到達した高さをはっきりと残っている。流入した関東ローム層の赤土が乾き土煙となって舞い上がる。

活動開始。ところが駅から数百メートル離れた最初に目標とした所蔵者宅が見つからない。沿道を聞き歩くが、「聞いたことないな」「俺の勘だとあっちの方かな」等の不確かな回答しか返ってこない。範囲を広げて探索したが、ついに断念。前途に暗雲が立ち込める。今回、台帳にした古文書所在目録は、水街道市史編さん時に行われた40年近く前のデータである。それぞれのお宅では、世代交代が進んでいるはずだ。場合によっては二世代くらい替わっている可能性もある。過ぎ去った歳月は、我々の前に大きな壁となって立ちはだかっていた。

次いで市役所近くまで数百メートル北上して、Iさん宅を見つけることができた。1mを軽く超える浸水被害を受けており、建物は傷み、庭先は廃棄物でいっぱいになっている。ボランティアの若者たちが、元気に家具や着物などを運び出している。忙しいIさんに手を止めていただき、お話を聞くことができた。

父親から受け継いだ古文書は、市立図書館に預けてあるのでここでは水損していないはずだ。ただそれ以外の絵画や書蹟が水に浸かり、処分を考えている、とのことであった。よく見ると庭先の廃棄物の中に、巻物が10点以上みえる。家の奥にも巻物が転がっていた。明治期の南画家の作品が含まれているらしい。ひどく濡れているため、その場で開いて内容を確認することは控え、保全のため預けてほしい旨申し出ると、快く承諾していただいた。連絡先をうかがい、詳細は後で調整することを伝え、調査の先を急ぐことにした。

市役所は、やはり騒然としていた。水害時には、浸水により孤立してしまった。隣接する駐車場の自動車は、泥で汚れたままだ。水流に飲み込まれて、動かなくなってしまったのだろう。庁内には炊出しのテントや救護所・給水所が設置されていた。市街地の中心部に入ると、浸水の痕跡は見られるものの、線路沿いほどではない。

やはり移転のため所在がつかめなかった市街地の旧家の親戚のお宅を見つけることができた。すぐに電話で避難所にいるという所蔵者に連絡を取ってくれた。幸い所蔵者が資料の重要性をよく理解していて、浸水前に古文書をすぐに2階にあげたため、すべて無事であったことが確認される。所蔵者自身が古文書の所在を認識しているかどうか、その保全には決定的な条件になるのだ。市街地の調査を終え、我々は、やや離れた中妻・新石下方面まで、自動車北上して確認調査を進めることとなった。

(転載歓迎 つづく)

5、決壊地点の惨状

9月19日、茨城史料ネットによる被災資料の確認調査が続いていた。常総市の市街地から県道357号を北上して、午後には中妻・新石下方面の確認調査を進めた。鬼怒川の堤防決壊地点に近づくので警戒していたが、堤防沿いであるにもかかわらず、浸水の痕がない。お宅に被害を尋ねても、「庭先が水につかった」とか「この辺りは無事」という回答。自然堤防沿いで少し土地が高いのか。水の動きは複雑で、自然災害の被災状況を正確に把握することの難しさを感じる。

決壊地点から500mくらいのところまで進むと、いきなり物々しい。アグリロードと交差する地点に設けられた検問で止められるが、「県と市の要請で」と切り出すと、あっさり通してもらえた。だがその先には目を覆いたくなるような光景が待っていた。亀裂の入った道路に積もる赤土の厚みが違う。軒が崩れた住宅、基礎ごと斜めに傾いた住宅。目的とするお宅は、その中の一軒だった。広い敷地に建つ母屋では、ご家族が片づけの最中だった。強い水圧を受け破壊された家屋には、大量の土砂が一気に流れ込んだのだろう。片づけといっても、処分するためだけに家財道具のすべてを運び出すのだ。

声をかけるのもためらわれたが、玄関近くにいた方に来意を説明する。手を休めて耳を傾けていただいた。古文書の所在は記憶にないとのことだったが、丁寧に対応していただき、かえって申し訳ない気持ちになる。さらに数軒先の古文書所蔵者宅に向かわなければならないが、前方をうかがうと県道が崩落している。隣の敷地には重機が入り、土木関係の作業員があわただしく働

き、とてもこれ以上は進めない。あと数軒先のはずだが、やむなく迂回することにした。

検問の置かれた場所まで県道を引き返し、常総きぬ大橋で鬼怒川を西にわたって北上し、県道 24 号を使って再び鬼怒川を東に越えて、県道 357 号に入り北から目的のお宅を目指すことになった。バリケードで車を止められ、徒歩で 100mほど進むと、そこに広がるのは戦場のような光景だった。濁流の流れた痕に家屋の残骸が無秩序に散らばっている。壊れた自動車や泥にまみれた自転車・家具等が点々と転がる。目指す旧家のあるはずの場所には、人間の生活のわずかな痕跡さえ見つけ出すことはできなかった。数軒分の、家屋はおろか、庭木も、塀も、屋敷地の区画さえも、泥のうねりの痕と化している。決壊場所から濁流の直撃を受けたのだ。しばらくは、メンバーの誰からも声は上がらず、われわれはその場に立ち尽くした。鬼怒川の流れの方角には、白く輝く巨大な応急堤防がすでに完成に近づいていた。

この日の調査はここまでで終了となる。虚脱感を抱えながら水海道駅前に戻る。まだ 10 軒を超える所蔵者宅の巡回が終わっていない。翌日も確認調査を継続する必要がある。事務局で動ける人員はわずかだ。被災地での家財道具の処分は、好天の予報が出ている明日の日曜日、さらに進むことだろう。待っているわけにはいかない。茨城史料ネットは、翌日も調査を継続するため、急きょ外部からの応援も頼んで体制を立て直すこととなった。

(転載歓迎 つづく)

6、捨てられていた文書筆筒

9月20日、茨城史料ネットは被災資料の確認調査継続のため、急きょ近隣県の史料ネットに救援を頼むことになった。千葉資料救済ネット・神奈川資料ネットに応援を要請し、経験豊かなメンバーを補充することができた。いずれの団体も、東日本大震災後のレスキュー活動でも支援していただいている、頼もしい「隣人」である。

確認調査3日目。残る調査区は、三妻駅から中妻駅にかけての東方、八間堀川が南北に流れ下る流域から小貝川右岸にかけての地域である。二班に分かれて、添田仁先生のグループは北半分、私の班は南半分を担当した。このあたりは鬼怒川から流れ込み、八間堀川から溢れた水がたまり、それが最後まで抜けなかった地帯だ。「新田」のつく地名も多く、近世に低湿地が開拓された地域が含まれるのだろう。

小貝川右岸に沿って調査を開始する。この日は朝から、不審者への注意を促す防災無線が途切れることなく流れている。被災地では、空き巣狙いや悪徳業者の勧誘による被害が出始めていた。そんななか「古いものありませんか？」と尋ね歩く我々は、不審者そのもの。まず身分証を示し、その誤解を解いてから、交渉を始めなければならない。川崎町の三軒のお宅を訪ねるが、いずれも浸水被害は軽微で、敷地内の納屋が水につかった程度。小貝川を背負うあたりは自然堤防上に旧集落が展開しているためか、浸水が及んでいないのだ。

そこから八間堀川沿いに移ると、状況は一変する。区画整理された農道沿いには、廃棄物が築地のように高く積まれていた。公民館や集落センターの庭もゴミの山だ。水田の中を走る道路は、

アスファルトが田の中に落ちている。水流によって下から押し上げられ、浮き上がって落ちたのだろう。流れる水のすさまじい威力を感じる。家屋はどれも泥まみれだ。浸水は2メートル以上の高さにまで及んでいた。

目的とした八間堀川に近い一軒に入る。若い家族が片づけの最中だった。まだ新しい家屋が泥だらけ。玄関先にいた子供にお父さんと呼んでもらう。来意を告げ、お見舞いの言葉をかける。家具を引きずり出す手を止めて丁寧に対応してもらえたが、古文書の所在はわからなかった。隣から奥さんが、「市に預けたような、寄贈したような記憶がある」と答えてくれた。別れ際に「今だから、こういう調査も必要なんだよな、頑張っ」とかえってこちらの方が励まされる。

午前の調査を終えて水海道駅前に戻ると、添田班から連絡が入る。小貝川沿いの被害は軽微だが、八間堀川沿いに移ると、やはり被害は大きいようだ。そこで廃棄されている文書筆筒を発見、中には古文書が満載の状態。尋ねてみると調査対象の旧家から出たものであることが判明した。お宅の人によると、他にも被災した古文書があるとのこと。午後は二班一体となり、この三坂新田町I家の資料レスキューにあたることになった。

(転載歓迎、 つづく)

7、I家資料を救え！

被災資料の確認調査に入って3日目の9月20日の午後、二班に分かれて被災資料の確認調査を続けていた茨城史料ネットのメンバーは、急遽、三坂新田町に集結しI家の資料をレスキューすることとなった。高橋班が到着すると、すでに添田班は資料の保全についての説明と提案を済ませていた。すぐにご当主が、母屋の裏手から、古文書のおかれた部屋に案内してくれた。垣根には浸水した高さまで泥が付着し、それは2メートルを越えている。

土足で家屋に上がり、押入れを開けると、古文書は、上下二段ある上の段に置かれた2つの衣装ケースの中に収められていた。ケース内にはまだ泥水が入ったままだ。悪臭が鼻をつく。庭先にブルーシートを敷いて作業場を設営し、水洗いすることになった。洗い終わった資料は、点数を数えながらビニール袋に入れていく。

一方、廃棄寸前で救出した文書筆筒からの取出しも行われた。ひどく傷んで汚れていた筆筒自体は廃棄することとし、引き出しを開けて中の古文書や軸装された資料を取出していく。このお宅は明治期の著名な南画家の生家でもあり、その中にはその画人の作品も多数含まれているようだ。

途中、私は、一旦作業を抜け出して、前日レスキューの約束をした市役所近くのM家に向かう。この日は一日天気もよく、気温もかなり上がっていたため、軸装された当該資料は、カビがひどく進んだようにみえた。匂いも強烈だ。預り証書を交わし、もとのI家に戻す。

I家では、洗浄が終わり、ビニール袋への収納が、経験豊かな参加者の手で効率よく進んでいた。資料はかなりの点数になる。500点は越えるだろう。何とか日没までに作業を終わらせることができた。すでに添田先生が、東北大学災害科学国際研究所に連絡を取り、真空凍結乾燥機

にかけてもらうことを依頼、先方は快く受け入れてくれていた。袋詰めされた資料は、すべて私の車に乗せ、大学に運び、あす梱包し直して、東北大学へ発送することになった。

I家は、この日の被災資料の所在確認調査の最後の目的地でもあったため、これで3日間にわたる調査は終了となった。今回の緊急調査は、依拠したデータが古いこともあり、所在の確認ができなかった資料も多かった。自治体史編纂以後、自治体と資料所蔵者との関係が維持されていないことが、資料保全について、どこでも同じ大きな課題なのだ。そうした中で、大規模な資料を伝えてきたI家を含む3軒の旧家で緊急のレスキューを実施できたことは、やはり大きな成果といえよう。やはり資料レスキューは、現地に入るタイミングが難しい。今回、シルバーウィーク以前に現地入りを決断できたことは、正解だった。

ただし今回の調査で被災状況を把握できたのは、あくまで40年前に古文書を所蔵していたことを行政が確認していた旧家のうち、そのまま存続しているお宅にすぎない。40年前には古文書等の所蔵が確認されていない旧家にも資料は眠っていたはずであり、今回の災害による被害の全貌は、依然未知数なのである。それについては、自治体や地元の研究者に頑張ってもらわなければならない。われわれも、情報が集約できる体制を整え、広報にも力を入れつつ、被災地を見守っていく必要がある。

(転載歓迎 つづく)

最終回、レスキューの後に

被災資料の確認調査3日目、9月20日の午後、三坂新田町のI家でレスキューした水損資料は、その夜、私の車で茨城大学へ運び込まれた。一緒に大学に戻るメンバーがいなかったので、この日行われていた県内市町村の採用試験を受験した大学院生を大学に召集し、資料を実習室に搬入、作業台の上にブルーシートを敷いて、一晩仮置きした。翌日に梱包して、東北大学災害科学国際研究所に発送して完了する予定であったが、予期せぬ事態が待ち構えていた。

翌21日、大学で院生1名、OB1名とともに、水損した資料の際梱包に取り掛かった。運送会社のクール便で東北大学に搬送するためだ。一晩置いただけで、明らかに匂いがひどくなっている。資料のまとまりごとに名札を入れ、ビニール袋で何回かくるみ、ビニールテープで口を閉じていく。さらにその上からブルーシートで包み、段ボール箱に入れられるものは入れて、ビニールテープで丁寧に閉じていく。匂いは漏れていない。これで大丈夫！

大学から比較的近い運送会社の集配所に持ち込み、クール便の依頼をする。ところが受け取ってもらえない。かなり中身が怪しまれている。冷静にみれば、この荷物はかなり怪しい。段ボール箱5個の他に、ブルーシートで嚴重に梱包された包みが10包み、中には不思議な形をしたものもある。中身について嘘はつけないので、「濡れ気味の古い書物」と申告していた。店内では本社に電話で確認していたが、結局「予冷がされていないこと」「送る荷物の中身について前例が無いこと」を理由に、発送は拒絶されてしまった。

どうしよう？一刻も早く冷凍しなければ、カビが発生・進行してしまう！一同途方に暮れる。

とりあえず受け入れ先の東北大学災害科学国際研究所に電話で事情を説明すると、なんと翌日、車で受け取りに来てくれるという。助かった！本当にありがたいことだ。この後、一旦大学に戻した資料は、翌朝、同研究所の車で東北へと旅立っていった。それを見送り、後始末まで含めて5日間を要した茨城史料ネットの被災資料の調査・レスキュー活動は、ようやく終了した。

ただしこれで常総市での史料レスキュー活動がすべて終了したわけではない。東北大学に送った資料の真空凍結乾燥が終わった後の処理は、もちろん我々が責任を持って行わなければならない。その後は、資料整理や公開も必要になるだろう。東日本大震災の被災資料がいまだに片付かず、その後も断続的に運び込まれる資料の整理・保全作業に追われている我々にとって、さらに重い課題を背負い込むことになったことは間違いない。元気を出して、学生・市民とともに前向きに取り組んでいきたい。

この常総市での一連の活動は、新聞等でも報道されたので、その後、被災者から資料に関する問い合わせが数件届いている。これにも責任ある対応をしていきたい。また数日後には、常総市役所の公文書が水損しているという情報もたらされる。その初期対応にも、我々は、関係機関の研究者と共同して当たることになるわけだが、その経緯や成果についての報告は、機会を改めることにしたい。

今回も、水害という危機にあたり、全国の市民や研究者、研究機関から、大きな御支援をいただいた。寄せられたご厚意に恥じないよう、被災地の復興を力強くサポートしていきたいと思う。茨城史料ネットを代表して、皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

(転載歓迎、おわり)

【付記】今回の被災資料所在調査には、多くの研究者・学生が参加していますが、この「私記」の中には、諸般の事情により、茨城史料ネット執行部のメンバーのみ実名で表記しています。3日間の調査、事後の作業にご参加・ご支援いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。

⇒関東・東北豪雨災害による資料レスキューに関するお問い合わせは、

茨城史料ネット 代表 高橋修 (osamu.takahashi.nzn@vc.ibaraki.ac.jp) まで

[茨城史料ネットの活動資金の御支援のお願い]

当会の文化財・歴史資料の救済・保全活動を御支援ください。下記の通り、郵便振替にてのご送金をお願い申し上げます。

[加入者名] 茨城史料ネット [口座番号] 00190-2-672263
